

おひさま通信

仲間が安心できるより良い
時間を増やせるように

～土曜日開所を進める～

※ 久喜市地活たいよう ※

土曜日開所のある日、目の前にある公園へ、仲間10名、職員3名で30〜40分ほど散歩に出かけました。歩くことや車椅子での移動がゆっくりの仲間に合わせて、ちよつと立ち止まったり、また進んだり、ベンチで座って遅れている仲間を待ったりと、13名、皆で少しずつ移動します。歩ける仲間が、車椅子の仲間を押すこともあります。

ゆつたりとしたペースでのこの散歩は、仲間同士が相手のことを少しずつ知り合い、関係を深めている場面のように、見ていて感じました。「なかなか外に出られないから、土曜日の利用が大好き」と話す仲間の発言は、うれしい反面、こんなちよつとした散歩にも行くことができない、仲間の暮らしの不自由さを痛感したものでした。



もしもの時は助けてもらいたい

Aさんは、不足ながら自分のことは自分でやり、長い間、自宅で暮らし

久喜市地域活動支援センターたいよう（以下、久喜地活）では、2022年4月より、月に2回、第一・三土曜日の開所を始めました。土曜日の日課は、近隣の公園への散歩やドライブ、レクリエーション、映画会などです。充実した日課づくりができてはいませんが、10名ほどの仲間が、土曜日の過ごし方を楽しみに通っています。

もともと祝日やお盆期間を開所していたこともあり、加えて土曜日の開所となると、久喜地活の職員体制では、ちよつと運営が苦しくなるかなと感じました。しかし、仲間の週末の暮らしぶりを知る中で、土曜日開所の必要性があると感じ、法人や久喜市との協議を進めました。

らしを支えています。外出や行動に支援が必要な仲間の余暇を、グループホームの力だけで充実させるのはとても難しいということ、容易に想像が付きませんでした。

自分たちに何ができるのか

久喜地活の仲間たちの週末の暮らしぶりを知り、すべての仲間の365日24時間を支えることは難しくても、少しでも安心できる時間を増やしたい、より良い時間を作りたいと、職員は思うようになりました。

法人や久喜市との協議を経て、無事、土曜日の開所が行えるようになりました。月2日、年間24日、しかも日中のみですが、必要な介助を受け、緊急の際には職員に助けを求められ、ちよつとした余暇を楽しめる時間を作ることができました。



してきました。大怪我をしたこと、加えて、原因不明の体の不調が長く続いたことから、今までのように体が動かさなくなり、暮らしがままならなくなりました。2年近くショートステイやリハビリ入所を行い、自分で暮らすための力を少し取り戻しましたが、今まで通りとはいきません。家族や支援者、関係者が施設やケアホームへの入所を勧める中、本人の希望で自宅に戻り、一人で頑張る暮らしが再開しました。

自宅に戻ってからは、トイレへの移動時に転ぶことが格段に増えました。久喜地活からの帰り、送迎の職員に、「自宅に入ってトイレを見守ってほしい」とよくお願いするようになりました。小さな怪我を繰り返しているAさんは「今度、大怪我をしてたら…」と恐怖を感じているように見えました。怪我自体への恐怖だけでなく、以前大怪我をした時の、苦しい状態で誰にも気づかれず、不安の中、長時間過ごしたことの恐怖も、本人の中に強く印象づいているようでした。

土日は、久喜地活は休み。担ってくれるヘルパー事業所も見つけづらく、金曜日の夜から月曜日の朝まで、不安な時間がずっと続く。そんな週末の暮らしが、体が思うように動かなくなつたAさんの現実でした。



法人からは、「一度始めたら、やっぱりできませんでしたと後戻りすることはできない。土曜日利用を頼りにした仲間が困ってしまう。覚悟を決めて継続できる運営をするように」と、温かく厳しい応援の言葉をもらい、強く心に留めました。

Aさんをはじめ、久喜地活の仲間たちの暮らしの中の不安や困難さ、不自由さは、自宅やグループホームで暮らす多くの仲間たちの暮らしにもあることなのだと捉えています。関わった仲間一人ひとりの暮らしの課題を、地域の課題として捉え、より良い方向へ進めていけるような視点を持つこと。暮らしの場が不足している仲間たちに、通所施設の職員である自分たちに何ができるのかを考え進めること。そんなことを現場では大切にしています。そして、久喜地活が課題に対しての何らかの役

服薬ができずに、健康被害や リスクが大きくなってしまつ

Bさん、Cさんは、不足ながら自立して暮らしていますが、それぞれの障害ゆえに、服薬を自己管理することができません。身体や脳の病気がある二人なので、平日は、久喜地活の職員が、利用時間以外の朝や夕の服薬のお手伝いをしています。しかし、土、日はまるで服薬ができず、心身ともに悪影響が出ているように感じました。

Bさんは足のむくみがひどくなり、靴が入らなくなる、もともと不安定な歩行が、より不安定になるなどの様子があり、病院からは、服薬がしっかりと行えないせいではないかと指摘されていました。

Cさんは記憶障害が重く、お薬カ

割を担うだけでなく、地域の仲間たち全体の暮らし向きがより良くなるようにと、行政へ発信し続けています。現在、入所施設で暮らしている仲間の、土日の日中支援が生活介護として認められておらず、補助金が大きく減額されています。そのことは、仲間の暮らしを狭め、施設運営を苦しめています。どこで暮らしていても、土日の日中の支援が、平日と同じく、もしくは平日以上に必要であることは明らかです。通所施設の土曜日開所の取り組みが、入所施設の仲間たちにも繋がっていくことを願っています。

久喜市地域活動支援センター
たいよう施設長

斉藤 裕子

